

中東和平への道のり

Palestine

[パレスチナ]

写真・文＝中岡 裕策 (JICA中東・欧州部)



エルサレムにある「岩のドーム」の前を歩くパレスチナ人。
イスラム教では、ここで預言者ムハンマドが天に昇ったといわれている



「嘆きの壁」の前で、トーラー(律法)を読むユダヤ教超正統派

キリストが十字架にかけられたとされる場所に建つ「聖墳墓教会」。教会内は荘厳な雰囲気包まれている



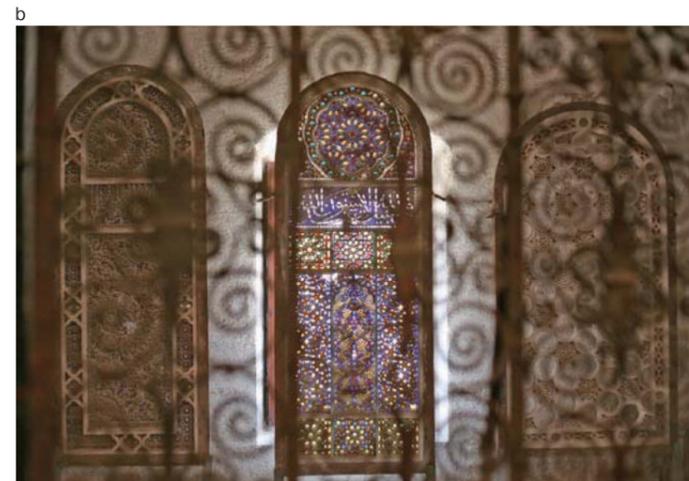
「アッサラーム・アレイクム」アラビア語で「こんにちは」という意味のこの言葉は、「サラーム(Peace)+アレイ(ou)+クム(you)」という単語から成り、直訳すると「平和をあなたの上に」となる。パレスチナをはじめ、エジプトやヨルダンなどのアラブ諸国を訪れると、このあいさつに必ず出会う。

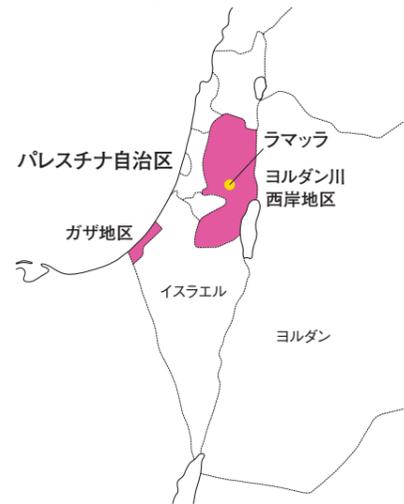
一方、パレスチナと紛争関係にあるイスラエルのあいさつは、ヘブライ語で「シャローム」。実はこの「シャローム」の語源が、アラビア語の「サラーム」と同じ意味の「平和」。両者には、語源や宗教上の決まりごとなど、多くの共通点がある。

さらにパレスチナとイスラエルには、イスラム教・キリスト教・ユダヤ教の聖地があるエルサレムをはじめ、それぞれの宗教にゆかりのある史跡が数多く存在する。エルサレムの旧市街を歩けば、3つの宗教の多様性が交差する光景に出会う。モスクから礼拝を呼びかけるアッザーンとともに祈りを始めるイスラム教徒、イエスが十字架を背負って歩いた「悲しみの道」を讃美歌を歌いながら進むキリスト教徒。そして、ユダヤ教徒はユダヤ教の聖地である「嘆きの壁」に向かって一心に祈りを捧げる。



a.モスクでのイスラム教徒。昼寝をする人もいれば、メッカに向かって祈る人もいる
b.陽光に光るイスラム美術
c.「嘆きの壁」に向かって祈るユダヤ教超正統派





暫定自治政府本部：ラマッラ(西岸地区)
 面積：6,020km²
 人口：約394万人
 (2009年/西岸地区：245万人、ガザ地区：149万人)
 言語：アラビア語
 宗教：イスラム教徒97%、キリスト教徒3%
 1人当たり国民総所得(GNI)：1,340ドル(2008年)
 経路：日本からの直行便はなく、ヨーロッパ各都市もしくはソウルでの乗り継ぎが一般的。
 通貨：シェケル(ILS) 1ILS=21.5円(2011年9月現在)
 気候：地中海性気候に属し、4~9月は晴天が続いて乾燥し、10~3月は雨が多い。ガザ地区より西岸地区のほうが1日の気温差が激しく、湿度が低い。



東エルサレムで出会ったパレスチナ人の少女

パレスチナ料理 チキンと野菜の炊き込みご飯 「マクルーベ」



パレスチナの食文化は、エジプトやレバノンなど周辺のアラブ諸国と共通点が多く、よく食べられるのは宗教上禁じられている豚肉を除いた牛、子羊、鶏の肉料理。また、サバに香辛料をたっぷりかけてオーブンで焼く「サマカハラ」に代表されるように、魚料理も一般的だ。

味付けは、オリーブオイル、ニンニク、レモン。また、乾燥させたタイムをすりつぶしてゴマや塩などと合わせた「ザータル」

というスパイスも欠かせない。パレスチナ人にとってスパイスは必須。どの料理も辛いのが特徴だ。

家庭料理の代表「マクルーベ」は、10人分を大鍋で作る豪快な炊き込みご飯。鍋に重ね入れた鶏肉、野菜、米に火が通ったら、そのままお皿にひっくり返して出来上がり。この調理法にちなみ、料理名はアラビア語で“Upside Down”。

東京・神田のレストラン「アルミーナ」では本場のパレスチナ料理が堪能できる。ヤギのチーズを使った代表的なデザート「カナフェ」は、国内ではこの店以外ではなかなか食べられない人気メニューだ。日本語も堪能なオーナーが笑顔で迎えてくれるアットホームなお店。



アルミーナ
 〒101-0046
 東京都千代田区神田多町
 2-2-3 元気ビルB1F
 TEL：03-5297-3789
 営業時間：11時半~14時半、17時~23時(月~土)
 12時~21時(日・祝)

- 【材料(2~3人前)】
 鶏モモ肉320g/ナス1本/ニンジン1本/ヒヨコ豆(水煮)少量/タマネギ4分の1個/ニンニク2分の1個/ご飯適量/オリーブオイル少量/A(クミン、ナツメグ、シナモン、ソンマック、塩コショウ各少々) <ソース用>プレーンヨーグルト100g/ミント、レモン、ソンマック各少々
- 【作り方】
 1. 鶏肉にオリーブオイル、ニンニクのみじん切り、Aをまぶしオープンカフライパンで火が通るまで焼き、焼いたら1センチ幅にカットする。
 2. ナスとニンジンの半量、タマネギを薄くスライスし、素揚げする。
 3. 残りのナスとニンジンを一口大に切ってAと炒め、ヒヨコ豆、ご飯を混ぜる。
 4. 小さめの器に1、タマネギ以外の2、3の順に重ね、ひっくり返してお皿に盛る。
 5. 2のタマネギとソースをかけて完成。

パレスチナ(および周辺のアラブ諸国)―イスラエル間の対立は最も長く続く地域紛争の一つで、中東全体の対立構造の根幹にある。この紛争の解決と中東の安定化は、石油の約9割を中東からの輸入に依存する日本にとっても重要だ。

1993年のオスロ合意に基づき、パレスチナの暫定自治区は「西岸地区」と「ガザ地区」の二つの地域に定められた。「西岸地区」は三重県、「ガザ地区」は東京都23区の6割ほどの面積に相当し、合計すると茨城県ほどの大きさ。ここに約394万人のパレスチナ人が暮らしている。

オスロ合意当初は和平の機運が高まったものの、現在はパレスチナとイスラエルの交渉が暗礁に乗り上げており、中東和平は先行きが不透明な状況にある。中東和平の核心的問題である「国境」「難民の帰還」「エルサレムの帰属」「入植地」の経過により論点が複雑化しており、解決は容易ではない。国際政治が生み落とした最も難解な問題の解決が一刻も早く望まれる。

旧約聖書に「乳と蜜の流れる土

地」と記されたパレスチナ。悠久の歴史の中、神の名のもとに、あるいは民族の誇りをかけた戦いが、ここで繰り返されてきた。今も二つの民族がそれぞれの正当性を争い、対立を続けるこの地に、平和が訪れ、過去の対立を超えて共存できる日が来ることを切に願う。



イスラム教の経典「コーラン」を読むパレスチナ人の男性。イスラム教徒にとって信仰は生活の一部だ



ベツレヘムの「聖誕教会」。イエスが生まれた地とされ、クリスマスには世界中から巡礼者が集う



道端で売られている、色とりどりのアラブの香辛料



[上]スイカの収穫に喜ぶ人々。ヨルダン川西岸の北部ジェリコでは、土壌汚染によりスイカの生産量が急減していたが、日本の接木技術の導入で再び収穫できるようになった
[下]JICAが作成を支援したジェリコ市の観光地図。世界最古の都市ジェリコには毎年多くの観光客が世界中から訪れる

中東地域の安定に向けた パレスチナの制度づくり・ 人づくりを支援

JICAは経済社会インフラの整備や人材育成を通じて、中東地域の安定化と平和構築を目指している。



「平和と繁栄の回廊」構想の中核事業である「ジェリコ農産物加工団地」の完成イメージ

1993年9月の「オスロ合意」によって暫定自治が始まり、国際社会からの支援が本格化したパレスチナ。しかし、2000年9月に第二次インティファダ(民衆蜂起)が起り、治安情勢は悪化。さらにその後のイスラエル政府の封鎖政策により交通・物流が制限され、パレスチナの経済は疲弊した。

そのような中、日本は06年7月、イスラエルとパレスチナの共存共栄に向けた中長期的取り組みとして、「平和と繁栄の回廊」構想を提唱。イスラエル・パレスチナ間の和平には「二国家構想」の実現が重要であり、将来的な国家樹立に向けてパレスチナ経済を可能な限り円滑に自立させていくことを打ち出した。そのためには、イスラエルやヨルダンなど近隣国との信頼醸成を図りつつ、パレスチナの経済社会基盤を強化していくことが大切であり、それに向けて現在、JICAはさまざまな支援を展開している。

その中心となるのが、ヨルダン川西岸地区での農業・農産加工分野の協力。パレスチナは農業が盛んであり、気候や地理的条件から農業のポテンシャルが高い。そこでJICAは、農家の技術レベルの向上や市場のニーズに合った作物の生産を促進し、中

小規模農家の収益性の向上を後押し。また、農産物を加工して付加価値を高めるための拠点や、作物の鮮度を保ったまま出荷するための流通拠点の整備を目的とし、隣国ヨルダンへの唯一のゲートウェイであるアレブ橋近くに「ジェリコ農産物加工団地」を設立する予定だ。完成すれば、ヨルダン経由での輸出を想定するパレスチナの中小企業のビジネスチャンスが拡大することが期待されている。

またJICAは、母子保健、観光、地方自治、中小企業、財政、上下水道などの分野の支援にも力を入れている。例えば母子保健分野では、05年から母子健康手帳の普及を通じた母子保健の改善に取り組んでいる。イスラエル政府の封鎖政策により日常的に移動の制限があるパレスチナでは、妊娠中の母親が毎回同じ病院で診察を受けられるとは限らない。それ故に、検診結果が記された母子健康手帳を持っていれば、病院が変わっても手帳の記録に基づいて適切な診療を受けることができるのだ。現地では「命のパスポート」と呼ばれ、利用者から高い評価を受けている。

観光分野では、官民連携による観光振興

を支援している。実はパレスチナは観光資源の宝庫。中でも約1万年の歴史があり、「世界最古の都市」として有名なジェリコには、石器時代の集落「テル・エス・スルタン」やイエス・キリストが悪魔の誘惑に耐えて40日間修行したとされる「誘惑の山」といった文化遺産が存在する。JICAはこうした資源を活用して多くの観光客を呼び込んでいけるよう、官と民の連携による観光協会の設立に協力している。

他方、ガザ地区への支援も重要だ。イスラエルの封鎖により物資の搬入が困難な中、JICAは世界保健機関(WHO)などと連携。ガザ地区の人々の健康と命を守るため、過去に日本が供与した医療器材のうち、古くて使用できなくなってしまったものに代わり、新しい器材を緊急支援した。

さらに近年、インドネシアやマレーシアなどを含む東アジアの国々をパートナーにパレスチナ支援を実施。今年5月にはJICAの支援で、パレスチナの工業団地開発を担当する関係者がインドネシアを視察した。JICAは東アジア諸国の開発経験をパレスチナに共有することを通じて、パレスチナ支援の輪を東アジアに広げる取り組みを行っている。



[右]2005年からパレスチナで普及を支援している母子健康手帳。現地では「命のパスポート」と呼ばれている
[左]マレーシアのハラール食品工場を視察するパレスチナ自治政府の高官。JICAは東アジア諸国と連携してパレスチナの制度づくり・人づくりを支援している